

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-10

十三年第三百五十八号

(発行年 / Year)

1910

十三年三月十八日

裁判官履歴

長崎縣長崎区本町平民

原告

山口

三郎

同縣西彼杵郡矢上村士族岡村貫道

代人廣島縣平民

被告

中島

安

藏

敷金取戻之訴及對之抗訴審問ヲ遂クル也

原告訴フル要旨ハ明治七年一月中日ハ失金敷金百圓ヲ受取り原告カ所有ナリシ今奥町旧五百八番地ノ家屋敷被被告岡村貫道カ岡村喜代登ナル者ノ貸渡シ月々金二圓宛家賃星トシテ受取ルヘキ契約ノ取極メ置キタル必右喜代登ニ於テ右原告カ家屋ヲ抵当トシテ塩屋安太郎ナル者ヨリ金圓借用ノ手賤ラ為シ居ルトノコトヲ傳聞シタルニヨリ明治九年十月頃ト覺テ原告ハ右喜代登カ不當ノ始末ヲ告發セントセシニ被告岡村貫道ニテ自知シ明治十年四月廿四日ヨリ更ニ該家屋ヲ同人ニ借受クヘク而シテ其借リ受ノ年數ヲ二ヶ年ト取極メ右代登借リ受ケ中ノ家賃金淹滞ノ為都度八十圓ノ内十圓ハ返済ニシテ被告ヨリ充入ルヘキトノコト以テ右喜代登カ不意ノ始末ヲ託ヒ只管原告ノ宿意ヲ乞フニヨリ之ヲ聽シ則チ前陳ノ敷金ハ其終置振ニシテ原告カ一圓返済シ、奥ト淹滞家賃同ノ廉トハカニ三號証ヲ受取右ニテ其一既落リ着ケタリキ尤モ被告ニ該家等ヲ貸渡スニ能テハ依然右代登トノ契約同様家屋賃二圓ノ口約アリ

長崎控訴院

此より
格

訂正
第
四
号

結に置キタリ然ルニ明治十二年四月申亥代金家賃ハノ
滞リ余ト被告カ借り受レ以来ニケ年分ノ家賃未納セ自
ホ八回ヲ受ケ取度旨被告ハ催促マシ知被答ニ於テハ數
金百圓ノミニテ家賃拂ハサルノ契約ナレハ之ヲ
拂フヘキノ道理ナキ料理不尽ノ答答ノミヲ為シ被告
ハ受テ數金百圓ヲ原告ニ於テ返還セサルモ、如ク申
出做シ之ヲ長等迄テ所ノ訴出テタルニヨリ原告ハ其
際ノ願末ヲ以テ之ニ答、置シニ扣款狀ニ掲載ノ通テ
判ヲ与ヘラレタリ然ルニ該テ所ニ於テ家賃金ヲ洋
價セレノウレシニ一ヶ月、二月九十ギト申レ水テ其評
價ノ如キハ最モ相宜ニシテ且ツ被告ノミニ係ル家賃金
ニケ年分ニテ七十二圓五十ギニオ三男証ノ十四ヲ附加
シ都合八十二圓五十ギヲ被告ヨリ受取ヘキ計算ト相成

長崎控訴院

シハ眞ニ至当ノ訴ナレ氏數金百圓ニ月二分ノ利率ヲ附
加シ彼之ヲ相殺ス、レト判決之レタル所ノ如キハ
何分不服ニ堪ヘサルナリ因テハ被告カ收領スヘキ百圓
百圓ニ一利率ヲ加ヘス原告カ受取ルヘキ家賃金八十
二圓五十ギト相殺ヲ為ス時ハ僅力ニ十六圓五十ギヲ被
答ニ戻シ取ニテ清済ノ道ニ至ルヘキモノナルニヨリ右
計算ノ通り覆審アラントシ此處望スル旨申立タ
リ

第
四
号

第
四
号

被告答フル要旨ニ被告ガ固村真代登ナル者數金百圓
ヲ以テ原告所有ノ家ヲ借り受ケ其後々明治十年四月ニ
至リ右百圓ヲ据置ニレテ該家ヲ被告ニ借り受ケシ迄ノ
間ニ原告申述ノ通りニ相違ナキモ被告ハ更ニ家賃金
ヲ求メヘキ契約ヲ為シタル丁之レナキナリ尤モ該



家屋ノアル所ハ今魚町ニシテ商業等ニ便利ナラサルハ
 勿論長崎区中ミテハ僻地トモ言フヘキ場所ニシテ
 其家モ不十分ナルハ敷金百円ノ外ニ家賃金ヲ
 出スヘキ程ノモノニアラサル一目シテ了然タル義ニ
 少レアリ然ルニ原告方ニテハ契約期限明治十
 二年四月トナリ被被告ノ談家ヲ立テ退カント異
 ニ差入レアル敷金百円ノ返却ヲ求メタル処原告ハ
 意外ノ言ヲ主張シ之ヲ差戻サルニヨリ遂ニ長
 崎区裁判所ヘ訴ヘ出テタル処控訴状掲載ノ通
 リ判決ヲ受ヘテ右ノ事實ニ違ヒタル所ハアレ被
 告ヨリ差入レシ百円ニ月割アリ利足テ附カスルナ
 レハ格別ノ損失ハセシナキニヨリ此ニ服従スル方然
 レハシト思考セシ折柄原告ハ右裁判ニ不服ヲ唱

長崎控訴院

へ終ニ控訴セ及ヒタリシモ其旨ハ所謂得手
 勝手ノ申分ニシテ固ヨリ採ルニ足ラサルナリ原告
 カ言フ如ク若シ果シテ家賃金重テ拵フヘキ契約
 ノアルアラハ既ニ原告方一二ニテ証ヲ作ル程ノ
 ヤレハ其家賃金ノ契約ヲモ証書ニ作り置クヘキニ
 其義ヲキテ以テ之ヲ觀シハ其契約ノアラサルヤ
 推テ以テ知ルヘキナリ既ニ斯ノ如クナルハ被告ニ於テ其
 家賃金重テ拵フヘキナルハ固ヨリ其所ノナレハ
 苟モ原告裁判ニ従ハヌ原告ニ於テ被告カ敷金ニ
 利足テ附カセサルモノナレハ其家賃金ノ談及セ
 難キ業ニ至瞭タリ尤モ原告方ニテ証ニ家賃金
 ノ義掲載アリト雖モ右ハ決シテ家賃金ノ証ニ之
 レナク是ハ是レ被告カ文書代金ニ於テ原告カ家



屋ヲ借用スル節數金百五十圓ノ用ナリト原告カ証書ヲ提出シ被告ヲ欺キ百五十圓ヲ取出シテ自圓ヲ原告ハノ數金トシ五十圓ヲ喜代金ニ於テ費用ヤシトシテアリシテ原告ハ如何シテ之ヲ聞キ得タルカ右証書眞實ニシテ原告ハ如何シテ之ヲ聞キ得タルカ示談ノ上家賃ノ名義ヲ以テ十圓ノ証書即チ三早証ヲ被告ヨリ原告ニ差入レタルモノナリ右ハ全ノ被告ニ於テ兄弟ノ間柄其罪惡ヲ露ハスニ忍ビス之ヲ掩ハンカ爲メニシタルモノナレハ決シテ家賃ノ義ニカサレナリ因テ原告ハ原告判ニ服従スルカ爲ラサレハ元來約定ナキ家賃金ナレハ被告ニ於テ之ヲ拂フ得タルヨリ單ニ數金ミテ被告ハ差戻ノ様ノ判決ヲ乞フ旨答弁セリ

長崎控訴院

因テ原告被兩造ノ申述ト証書トヲ比照シ裁判スル左ノ如シ

第壹條

原告ニ於テ被告ヨリ收領スヘキ貸家賃金ニ當初岡村喜代金借用ノ時ヨリ數金百圓ノ上ニ日々付内宛テ受取ルヘキ取極ニテ被告借家ノ時ニ於テ之依極其前内宛ハ收受スヘキノ契約ナリニ付申述スト雖凡一ニ其申述ヲシテ認服ヲ禁ヘコトハキ証憑ヲ出シ得タル上ハ果シテ其契約ヲ約ラシテリト謂フ得タルニ依リ其申述ノ趣肯ハ相立ス

第貳條

原告ニ於テ長崎區裁判所ニ於テ借家ノ賃金ヲ

ウウ
新
長崎
控訴
院

評價セシヌラレシ一ヶ月計四九拾貳ハ最モ相
當ノ價定ナレハ該金高ニ以テ計算ヲ起シ被先
ノ諸家中金ニケ年ノ家賃金都合七拾貳圓五拾
錢ニ第三号証ノ拾月ヲ附加シ八拾貳圓五拾錢
ヲ被先ノ數金有月ヲ宅利息ニシ相殺ノ遂クハ
時ハ僅ニ拾六圓五拾錢ヲ被先ニ渡シ皆済トナ
ルヲナレハ該差引ノ計算ニテ判決アラントナ
冀望スル旨申述マシモ元來貳圓ノ家賃ヲ契約
セシト言フ厚先ニシテ更ラニ又評價ノ高ニ依
リ計四九十錢ノ計算ヲ以テ之ヲ取領セントハ
派理ノ太甚シキモタルノミナラズ該家賃金ノ
如キハ厚先并第三号証ニ依リ其定額アルヲ認是メ
ハ干渉アルニヨリ決シテ評價ノ高ニ依テ計算
ヲ立ツヘキモノニ此ヌ

長崎控訴院

第三條

被先ニ於テ厚先ノ家賃ヲ借用スルニ付數金有月
ノ外ハ家賃金ヲ出サレル給束ニシ其厚先并第三
号証ニ家賃ノ新登載シタルハ決シテ家賃ノ誤
ニ非ス右ハ被先ノ弟岡村素代登ニ於テ厚先カ
名ヲ假リ被先ヨリ金円ヲ取出シタル跡更ニ掩
ハンカ書メ之ヲ家賃ノ名義ニシ厚先入差入レ
タル証書ナリト申述スルト雖モ其之レヲ証ス
ヘキ證據ナク而シテ該証中金拾月但シ明治九
年七月ヨリ本年本月迄家賃此弟岡村素代登相
納可申答ノ処今般更ニ拙者引受同人ニ不拘証
書通り宅相違相細申申促也ト歴々記載アルヲ

以テ之ヲ觀レハ敷金百円ノ外二月迄円宛ノ家
賃金ヲ出スヘキ契約ナリシト明瞭ナリ既ニ斯
ノ如クナレハ被先ハ其敷金ヲ堪置キ接續其代
登ニ代ツテ厚先カ家ヲ借リヌルモノナレハ厚
被ノ間ニ於テ月々迄円ノ家賃ヲ拂フヘキ契
約アリシヲ認定スルニ足ル

第四條

前条々ノ理由ナレバ以テ厚先ハ一ヶ月金迄円
宛ノ家賃ニ十四ヶ月分ナリ於テ四月ト第三号
証ノ拾円トヲ合セ參拾四円ノ敷金百円ノ内ヨ
リ扣除シ残ル六十六円ハ遲ニ被先ハ返却スヘ
キモノトス

但ニ訴訟入費ハ現ノ通り厚先ヨリ被先ニ

長崎控訴院

後フヘシ

長崎上尋裁判所

明治十三年十月

判事 長岡重弘

判事補 石田馬場昌

右應寫ス

明治廿六年七月廿一日

長崎控訴院

新形書記 池邊源太郎

長崎控訴院

長崎控訴院